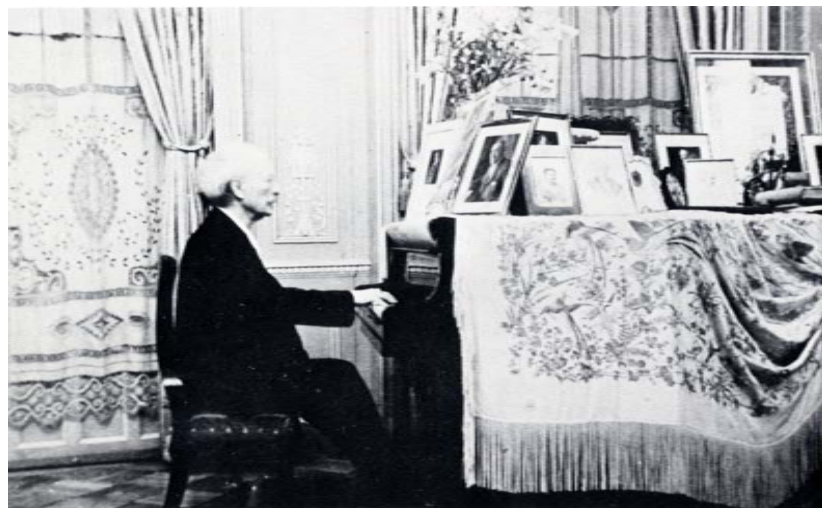


2010●図書館展示 6-7 月

2010年6月21日～7月30日



生誕 150 年

イグナツィ・ヤン・パデレフスキ



I. Paderewski

企画●国立音楽大学附属図書館広報委員会

場所●図書館ブラウジングルーム・AV 資料室

生誕 150 年 イグナツィ・ヤン・パデレフスキ

ショパンの楽譜「パデレフスキ版」で名を知られているイグナツィ・ヤン・パデレフスキ。彼はポーランドを代表するピアニストであり、作曲家であり、政治家でもありました。今回の展示では、今年生誕 150 年を迎えたパデレフスキの様々な姿をご紹介します。

- Contents -

パデレフスキの生涯	2
パデレフスキの作品	4
パデレフスキから見た音楽家たち	4
展示資料	6

企画 国立音楽大学附属図書館広報委員会

パデレフスキの生涯

デビューまで

1860年11月6日、ポドリア地方のクリウフカ(現ウクライナ領)に、広大な領地の管理者であった父ヤン・パデレフスキと母ポリクセナの第2子として生まれる。幼い頃からピアノに興味を持ち、音楽の才能を示したパデレフスキは、姉とともに個人教授からピアノのレッスンを受けるが、最初の教師はヴァイオリニストでピアノに関する知識はなく、次の教師も姉と連弾をさせるばかりで、得るものはなかった。

1872年にワルシャワ音楽研究所(音楽院)に入学し、音楽理論や和声、対位法などを学び、ピアノ以外の楽器も経験する。しかし、ここでもピアノ教師には恵まれず、ピアニストには到底なれないとも言われている。途中2度の放校処分を受けながらも、1878年に首席で卒業し、そのまま母校のピアノ科の教師となった。1880年に音楽研究所の同級生、アントニナ・コルサクヴナと結婚するが、彼女は翌年男子を出産した直後に亡くなってしまふ。

妻の死後、1881年から、作曲を学ぶためにベルリンを2度訪れ、最初はフリードリヒ・キール、2度目はハインリヒ・ウルバンに師事する。また、ベルリンでは、パデレフスキの出版者となるフーゴ・ボックと出会い、多くの著名な音楽家たちと交流する機会も得た。

1884年にウィーンに移り、高名なピアノ教師のレシェティツキーに師事する。この時24歳で、ピアニストとしては既に遅すぎると言われ、指の練習から始めさせられることになる。これまで適切な指導を受けてこなかったパデレフスキは、レシェティツキーによって研究・練習の方法を学んだ。1885年から約1年間、レシェティツキーの紹介でストラスブル音楽院の教師を務めた後、本格的にピアニストになる決心を固めて、再びレシェティツキーに師事した。

音楽家としての活躍

1888年、レシェティツキーの妻でピアニストのアネット・エシポフの助力により、サル・エラールでの演奏会でパリデビューして大成功を収める。以後各地で演奏会を行い、1890年にセント・ジェイムズ・ホールでロンドンデビュー、1891年にカーネギー・ホールでニューヨークデビューを果たす。北米ではこれを皮切りとして、腕や指の苦痛と闘いつつ、4か月間で100回以上の演奏会をこなした。以来生涯にわたって幾度も北米演奏旅行を重ねている。

そして、ヨーロッパ全域、南米、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなど、世界中で演奏活動を行っていく。演奏会の収益をたびたび慈善事業に寄付し、1896年にはアメリカで若い作曲家のためのパデレフスキ財団を設立、1898年にはワルシャワで作曲コンクールと演劇コンクールを創設した。

演奏活動を続ける一方で作曲に専念した時期もあり、大規模な作品を残している。1901年5月29日にオペラ(マンル)がドレスデンでシーズンのハイライトとして初演され、ニューヨークなど数都市でも上演された。1909年2月12日には、交響曲短調(ポーランド)がボストンで初演された。

また、私生活の面では、友人でヴァイオリニストのゴルスキーの妻であり、パデレフスキの亡妻との息子の世話を引き受けていたヘレナと、彼女の離婚後の 1899 年に再婚した。息子のアルフレッドは生まれつき病弱で障害を持っており、1901 年に亡くなっている。

ポーランド首相へ

1910 年、グレンヴァルトの戦い(1410 年、ポーランドがドイツ騎士団に勝った戦い)の 500 周年記念祭において、アントニ・ヴィヴルスキ製作の記念碑の除幕式が行われた。これは、パデレフスキの依頼により製作されたもので、記念碑の設立は彼が 10 歳の頃から抱いていた夢でもあった。また、同年、ショパンの生誕 100 年記念に際して国民の前で演説を行い、この年が政治家として踏み出す契機となった。

18 世紀後半の 3 度のポーランド分割と 1815 年のウィーン会議による第 4 次分割以降独立を失っていた祖国の復権のため、パデレフスキは自身の名声や人脈を生かして国際的に活動していく。第一次世界大戦勃発後、作家ヘンリク・シェンケヴィチとともにポーランド国民のための援助委員会を設立し、1915 年にはロンドンにポーランド戦争罹災者救済基金を創設した。1918 年から 1921 年の間は、音楽活動を中止し、政治活動に専念している。第一次大戦後の 1918 年、アメリカのウィルソン大統領の 14 カ条の平和原則を受けてポーランドは独立を回復する。ポーランドでは、ドモフスキとピウスツキを筆頭とした 2 派の対立があり、その仲介役を期待されたパデレフスキは、1919 年 1 月 16 日に首相兼外相に就任した。

そして、1919 年 1 月 18 日に開会されたパリ講和会議にポーランドを代表して出席し、6 月にヴェルサイユ条約に署名した。しかし、アメリカに迎合してポーランドの国家利益を損なっているとの批判を受け、2 度目の組閣に失敗して同年 11 月に首相の座を降りた。1921 年には、国際連盟のポーランド代表という最後の公的な地位を辞し、以後政治とは私的な形での関わりとなった。

晩年とパデレフスキ版

パデレフスキは 1922 年に再び音楽活動に復帰する。また、パリ留学中の若いポーランド人作曲家たちの支援も行った。

1937 年、スイスのモルジュにて、ワルシャワのショパン研究所から派遣されたルドヴィク・プロナルスキとユゼフ・トルチンスキとともにショパン全集の編集に着手した。ショパンの祖国から出す初めての全集で、ポーランドの威信をかけた文化事業であり、そこにパデレフスキの名を冠することは大きな意味を持っていた。しかし、時間などの面から見て、パデレフスキ自身が実際の作業にどれほど関わっていたのかは疑問だと考えられている。パデレフスキ版の出版は第 2 次大戦後で、パデレフスキの死後のこととなった。

1939 年、ナチスのポーランド侵攻をきっかけにアメリカに渡り、祖国支援のためのキャンペーン活動を行った。そして、そのまま祖国に帰ることなく、1941 年 6 月 29 日にニューヨークで客死し、アーリントン国立墓地で国葬が行われた。パデレフスキは生前から数多くの勲章を受けており、没後には、ポーランド政府の軍事上の最高の荣誉である軍事得行十字勲章が授けられた。

参考文献

- ・原田光子訳『パデレフスキー自伝』(第一書房)(請求記号 C65-072)
- ・西原稔『パデレフスキの生涯--偉大なピアニストそして偉大な政治家』
(『シヨパン』17(11), p.73-75, 2000.11)(請求記号 P893/17(11))
- ・「特集3 パデレフスキ生誕150年によせて」(『シヨパン』27(6), p.98-104, 2010.6)(請求記号 P893/27(6))
- ・「ニューグローヴ世界音楽大事典」(講談社)の「パデレフスキ, イグナツィ・ヤン」の項目
(請求記号 X-001/NG/13)
- ・宮島直機「IV 政治家パデレフスキ: 転換期の舞台で」
(http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~miyajima/_talQW-p.html)

パデレフスキの作品

パデレフスキが作曲活動を行っていたのは、1880年前後から1900年代までの約30年間であった。作品番号24番までと、作品番号のついていない作品が数曲確認されており、大部分はピアノ作品である。

作品17までは、ピアニストとしてデビューした1888年よりも前に出版されていて、その多くは通常彼自身によって演奏された。ピアノ作品の中で最も知名度が高いのは、〈演奏会用ユモレスク〉作品14の第1番(メヌエット)で、比較的演奏される機会も多く、他の楽器編成に編曲された楽譜も出版されている。

唯一のオペラ(マンリ)作品20や、〈ピアノとオーケストラのための幻想ポロネーズ〉作品19といった大規模な作品は、1889年から1909年にかけての、演奏旅行を行わなかった夏の間に作曲されている。交響曲短調(ポーランド)作品24が作品番号の付けられた最後の作品である。政治活動を行うようになった頃からは作曲を止めているが、1917年に、自身の作詞によるアメリカのポーランド軍の讃歌が作られている。

パデレフスキから見た音楽家たち

『パデレフスキー自伝』(請求記号 C65-072)より、パデレフスキが有名な音楽家たちについて語っている部分を抜粋してご紹介します。(旧字旧仮名は現代表記に置き換えています。)

リヒャルト・シュトラウス Strauss, Richard, 1864-1949

“彼の演奏を楽しむには一つの大きな障碍があった。それはシュトラウスがピアノを弾きながら、恐しく鑑面をすることで、これは私に自分の演奏中の顔の表情研究をする決心の動機となった。実際見てみると、ひどく可笑しいのだが、又痛ましい気がして、こちらがきまりが悪くなる程である。実際これは見ものであり、演奏外の余興であった。” (p.74)

アントン・ルービンシュタイン Rubinstein, Anton, 1829-1894

“始めから、高貴にして善良なる人物、絶對的に卓越した芸術家として、私を感動させた。何か神秘的なものが少しただよっていて、自然な偉大さが備っていた。彼こそは巨人的人物である。” (p.79)

ヨーゼフ・ヨアヒム Joachim, Joseph, 1831-1907

“素晴らしい技巧家で、自由自在にヴァイオリンを駆使することが出来、同時に又真の音楽家である。その演奏は気品に満ち、印象的であった。人物に於ても芸術に於ても、偉大なる人であった。彼を一目見た者や、又演奏を聴いた者が受ける最初の印象は、彼の持つ不思議な威厳である。これは稀なる資質である。” (p.81)

パブロ・デ・サラサーテ Sarasate, Pablo de, 1844-1908

“誠に感じのよい、素晴らしい芸術家で、完璧の技巧と、想像し得る限りの美しいヴァイオリンの音色を持っていて、音色の点ではヨアヒムより美しかった。(中略)人に愛される性格の持主であり、信実のある友人であり、仲間に親切で、殊にフランスや、スペインの作曲家を援助していた。” (p.82)

ヨハネス・ブラームス Brahms, Johannes, 1833-1897

“かなり静かな人だ、他には云いようが無い。(中略)ブラームスは決して常に親切な人物ではなく、時には粗野だという評判もあったが、彼は粗野というより不愛想であることを好み、楽しんでいたので、私は彼が、性格的に真実粗野だとは感じない。むしろ、一種のポーズで、彼の非常なる敏感さを守っているのだと思う。” (p.110)

ハンス・フォン・ビューロー Bülow, Hans von, 1830-1894

“非常な皮肉やで、余りに機智に富んでいる為に不公平である場合さえもあった。これは常に危険をはらむ性格である。彼は他人について、諧謔的な批評をするのを慎むことが出来ず、それを心から楽しんでいた風であった。” (p.145)

シャルル・グノー Gounod, Charles, 1818-1893

“彼は驚くべき人格の持主で、容貌には何か、高僧を想起させるものがあった。グノーは美しい白髪のと、素晴らしい程表情的な眼を持って、堂々としていた。弁舌はさわやかで熱烈で、時にはやや牧師のような趣きがあったが、彼の語る文章はいつも完全で、その声には極端な抑揚が無く、快い調和があった。親切で慈悲深く、真に立派な人物であった。” (p.157)

カミーユ・サン＝サーンス Saint-Saëns, Camille, 1835-1921

“此の人は、非常に博学な驚くべき人物で、学識が広く、哲学書を書き天文学書まで書いていて、仏蘭西翰林院の会員である。(中略)彼はめったに感情を人に見せる男では無いからである。彼が感じの善い人物でも、人好きのする人物でも無い事は有名で、常に近づき難い人ではあったが、私に対しては、親切に思い遣りが深い人であった。” (p.158)

ヨハン・セバスチャン・バッハ Bach, Johann Sebastian, 1685-1750

“私が全世界に向かって、喜んで宣言したいその言葉は、凡てのピアニストはバッハを弾け、という事だ。バッハを学ばずしてピアニストには成れない。(中略)バッハは私にとって音楽上の一種の神性であり、音楽的に云えば、バッハは宇宙的な大天才、巨人である。” (p.369)

展示資料



< パネル >

ピアノを弾くパデレフスキ (少年時代)

出典: Lawton, Mary, Stephen Citron, and Ignace J. Paderewski. The Paderewski Memoirs. Da Capo Press music reprint series. New York: Da Capo Press, 1980.

ワルシャワ音楽研究所 (音楽院)

パデレフスキは 1872 年入学、1878 年卒業。卒業後にピアノ科の教師となった。

出典: Sokolowska, Zofia, Wiktor Litwinski, and Wladyslaw Duleba. Paderewski. New York: Kosciuszko Foundation, 1979.

レシェティツキー Leschetizky, Theodor, 1830-1915

ピアノ教師として数百名に及ぶ弟子を持ち、パデレフスキのほか、多くのピアニストを輩出した。

出典: Sokolowska, Zofia, Wiktor Litwinski, and Wladyslaw Duleba. Paderewski. New York: Kosciuszko Foundation, 1979.

ピアニストとしてデビューした頃のパデレフスキ

出典: Lawton, Mary, Stephen Citron, and Ignace J. Paderewski. The Paderewski Memoirs. Da Capo Press music reprint series. New York: Da Capo Press, 1980.

二重協奏曲を演奏するパデレフスキとサン＝サーンス

1912 年。サン＝サーンスの隣にはピアニスト・作曲家のアーネスト・シェリングがいる。

出典: Landau, Rom. Ignace Paderewski, Musician and Statesman. New York: AMS Press, 1976.

オペラ《マンル》の自筆譜

1901 年、ドレスデンにて初演。

出典: Opienski, Henryk. Ij. Paderewski: Esquisse De Sa Vie Et De Son Oeuvre. Lausanne: Editions Spes, 1928.

パリ講和会議

1919年1月。開催直前に成立した内閣で首相兼外相となったパデレフスキはポーランドを代表して出席した。ウィリアム・オルペン画。

出典: Zamoyski, Adam. Paderewski. New York: Atheneum, 1982.

パデレフスキが描かれたポーランドの紙幣

1975年-1995年に使用されていた。

出典: Wikimedia Commons<http://commons.wikimedia.org/wiki/File:2000000_zl_a_1992.jpg>

スイス、リオン - ボソンのパデレフスキ邸

出典: Sokolowska, Zofia, Wiktor Litwinski, and Wladyslaw Duleba. Paderewski. New York: Kosciuszko Foundation, 1979.

パデレフスキの部屋 (リオン - ボソン)

出典: Lawton, Mary, Stephen Citron, and Ignace J. Paderewski. The Paderewski Memoirs. Da Capo Press music reprint series. New York: Da Capo Press, 1980.

シカゴで演説をするパデレフスキ

1916年。

出典: Sokolowska, Zofia, Wiktor Litwinski, and Wladyslaw Duleba. Paderewski. New York: Kosciuszko Foundation, 1979.

自宅でピアノを弾くパデレフスキ

1930年代後半。

出典: Zamoyski, Adam. Paderewski. New York: Atheneum, 1982.

< 図書 >

原田光子訳『パデレフスキ自伝；愛国の音楽者』

東京：第一書房, 1940 請求記号 C65-072

自身による第1次世界大戦前までの回想録。英語版あり(請求記号 C31-976)

原田光子訳編『大ピアニストは語る』

東京：東京創元新社, 1969 (Music library) 請求記号 C23-186 他

パデレフスキによる2つの小論(「音楽芸術の幅の広さについて」「テンポ・ルバートについて」)が掲載されている。

『クラシックCDエッセンシャル・ガイド100』

東京：学習研究社, 2004 (Gakken mook) 請求記号 J101-951

100人のピアニスト・鍵盤楽器奏者を5つのキーワードとそれを象徴する演奏で紹介。展示箇所はパデレフスキの項。

『偉大なピアニストたちの至芸；アート・オブ・ピアノ』

東京：ヤマハ・アトス・ミュージック・アンド・ビジュアルズ, 2008

(ヤマハ・アトスDVDブック・シリーズ - 映像がすべてを語る)

請求記号 J113-370

付属のDVDには、パデレフスキが出演した映画「月光ソナタ」(1936年)より、リストの(ハンガリー狂詩曲第2番)の演奏場面が収録されている。

ステファン・キエニエーヴィチ編『ポーランド史．2』

東京：恒文社, 1986 請求記号 J57-751/(2)

展示箇所はパデレフスキが首相を務めていた頃の年表。

Adam Zamoyski "Paderewski"

New York: Atheneum, 1982 請求記号 C35-302

パデレフスキの伝記。作品リスト、レパートリーリスト付き。

Wladyslaw Duleba, Zofia Sokolowska "Paderewski"

New York: The Kosciuszko Foundation, 1979 請求記号 C36-823

豊富な図版と自伝からの引用によってパデレフスキの生涯が綴られている。

< 雑誌 >

レギナ・スメンジャンカ “パデレフスキと私の出会い(前編)”

ショパン 18(12), 88-91, 2001-12 請求記号 P893/18(12)

後編: ショパン 19(1), 120-123, 2002-01 請求記号 P893/19(1)

西原稔 “パデレフスキの生涯--偉大なピアニストそして偉大な政治家”

ショパン 17(11), 73-75, 2000-11 請求記号 P893/17(11)

< 楽譜 >

"The most beautiful Paderewski"

Krakow: Polskie Wydawn. Muzyczne, 2002 請求記号 G29-655

代表的なピアノ作品を収録。

"Menuet, op. 14 no. 1"

東京：新興音楽出版, 昭和10 [1935] (宮田東峰ハーモニカ楽譜) 請求記号 H22-900

(メヌエット)のハーモニカ用編曲。

"Menuet"

[Tokyo]: Edition Zen-on, c1966 (Zen-on's violin piece; v. 28) 請求記号 H1-320

(メヌエット)のクライスラーによるヴァイオリンとピアノ用編曲。

"Minuet in G"

Chicago: Rubank, c1945 (Rubank marimba solos with piano accompaniment) 請求記号 H8-622

(メヌエット)のマリンバとピアノ用編曲。

"Concerto en La-mineur pour piano et orchestre op. 17"

Berlin : Bote & Bock, [19--] 請求記号 G9-075

(ピアノ協奏曲イ短調)の2台ピアノ版。

"Six songs, op. 18"

Huntsville, Tex : Recital Publications, 1986 請求記号 F15-441

"Piano sonata in E-flat minor, opus 21"

[United States] : Elibron Classics, [2001] 請求記号 G30-473

"Douze melodies, opus 22 for medium voice (D4-F5) "

Huntsville, Tex : Recital Publications, 1986 請求記号 F15-442/(1), F15-443/(2)

"Variations and fugue for solo piano, op. 23"

Boca Raton, Fla : Masters Music Publications, [200-?] (Master piano series) 請求記号 G30-471

Fryderyk Chopin "Preludes for piano"

Warsaw : Fryderyk Chopin Institute, c1949 (Fryderyk Chopin complete works ; v. 1)

請求記号 A0-461 他

パデレフスキ版ショパン全集の第1巻。

< A V 資料 >

"Piano concerto in A minor, op. 17"

イェジー・マクシムク指揮、ピョートル・パレチュニ(ピアノ)、ポーランド国立放送交響楽団

[東京]:ANFコーポレーション, [198-] 請求記号 XD4799

"Polish fantasy, op. 19"

Regina Smendzianka(ピアノ)、国立フィルハーモニーワルシャワ

West Sussex, England : Olympia, 1988 請求記号 XD10527

"Paderewski plays Chopin, Volume 1"

イグナツィ・ヤン・パデレフスキ(ピアノ)

E. Sussex, England : Pearl, 1988 請求記号 XD12608

"Piano concertos"

イェジー・マクシムク指揮、Piers Lane(ピアノ)、BBC Scottish Symphony Orchestra

London : Hyperion, 1991 請求記号 XD14517

"Intégrale de l'œuvre pour piano"

Karol Radziwonowicz(ピアノ)

[S.l.] : CDM : Distribution, Harmonia Mundi, 1992 請求記号 XD23867

"Bauer ; early recordings by the pianist"

ハロルド・パウアー(ピアノ)

[Tokyo] : Denon, 1993 請求記号 XD25157

"Ignacy Paderewski"

イグナツィ・ヤン・パデレフスキ(ピアノ)

Amsterdam : Philips ; [東京]: 輸入・発売: ポリグラム, 1999 請求記号 XD41841-2

「あらえびす S P 名曲決定盤. 4」

イグナツィ・ヤン・パデレフスキ(ピアノ)

--ポロネーズ 第2番 変ホ長調 作品26の2 / ショパン

ピアノ・ソナタ 第14番 嬰ハ短調 作品27の2 ; 月光 / ベートーヴェン

[東京]: 音楽之友社, 2000 請求記号 XD44745

"Ignace Jan Paderewski plays his favorites 1912-1937"

イグナツィ・ヤン・パデレフスキ(ピアノ)

Tokyo : RCA Red Seal, 2002 請求記号 XD48747

"Legends of the maestros"

江口玲(ピアノ)

[Tokyo]: NYS Classics, 2003 請求記号 XD57358

"Piano sonata in E flat minor, op. 21

; Variations and fugue on an original theme in A minor, op. 11

; Variations and fugue on an original theme in E flat minor, op. 23"

Jonathan Plowright(ピアノ)

London : Hyperion, 2007 請求記号 XD60250

"Great pianists in the late 19th century "

イグナツィ・ヤン・パデレフスキ(ピアノ)

--ポロネーズ 第6番 変イ長調 作品53 ; 英雄/ ショパン

マズルカ 第17番 変ロ短調 作品24の4/ ショパン

バラード 第3番 変イ長調 作品47/ ショパン

[Tokyo]: Min-On, 1993 請求記号 XD60359

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>

2010/6/25 編集 国立音楽大学附属図書館広報委員会 : 二塚恵里・撰正弘